

2003年3月

「コリーグ」35号 目次

巻頭言(1~2) 第30回研究員集会(3) COE 特集(COEの研究計画、各グループの進行状況 4~5) 公開研究会の記録、センター往来(6) 新任者・離任者から一言(7~9) 新旧研究員から(10~11) 情報調査室だより、編集後記(12)

巻頭言



「評価の手法 — 計量化の課題」

根岸正光 (国立情報学研究所教授、国際・研究協力部長)

*NATURE*誌の2001年2月15日号に、ヒトゲノム解読の完了を報告する「国際ヒトゲノム解読共同体」による歴史的総括論文が掲載された。同時期、*SCIENCE*誌にはセラ・ジノミックス社の研究者らによる同様の総括論文が掲載され、これは、ゲノム解読における官民対決あるいは産学対決の図式ともあいまって、随分話題になったものである。そしてほぼ1年後、2002年1月10日号の*NATURE*誌に"Errors in Citation Statistics"という記事が出た。これは、上記2論文の引用数をISI社の引用索引データベースで調査したところ、*NATURE*論文への引用の方が*SCIENCE*論文に比べて格段に少ないので、さらに調査したところ、統計上の重大な誤りを発見し、ISI社にその訂正を申し入れたことを報じた記事である。

そこで筆者も、国立情報学研究所で運用しているISIのSCI(Science Citation Index)データベースで点検してみたところ、その事情は次のようであった。*NATURE*論文は体裁上「国際ヒトゲノム解読共同体」という団体名義(団体著者)の論文で、共同体参加の機関・個人名簿は別表として掲げられている。しかし、この論文を引用する際、共同体名義の論文として「正しく」引用する

No. **35**

ものの他に、参加者名簿の筆頭研究者を第1著者として引用するものも相当数にのぼっているのである。一方、*SCIENCE*論文の方は多数の個人名を共著者として連記する通常の体裁であったので、こうした集計の分割は発生しない。ISIが運用する検索システム"Web of Science"では、書誌記述的に正しい団体著者名での*NATURE*論文に対する引用だけを集計していたため、*SCIENCE*論文の方が圧倒的多数の引用を獲得しているように見えたというわけである。なお、団体著者と筆頭研究者名での引用を合わせれば、統計は逆転して、*NATURE*論文の方が多くの引用を得ていることが判明した。

これはコンピュータによる機械的「名寄せ」処理に関する古くて新しい問題である（根岸正光・山崎茂明編著「研究評価 — 研究者・研究機関・大学におけるガイドライン」、丸善、2001）。*NATURE*の同記事は、インパクト・ファクター（雑誌別論文当たり平均引用回数）計算に使用される論文数にも誤りが発見されたと報じ、ISIの数字を「盲信」する危険を指摘し、各自における点検を呼びかける格好で記事を結んでいる。

同じく2002年の*NATURE*誌に関しては、米国ベル研究所の若手研究者によるねつ造論文が多数掲載されていたことも話題になった（Geoff Brumfiel, "Misconduct finding at Bell Labs shakes physics community," *NATURE*, 2002年10月3日号, pp. 419-421）。この件について、愛知淑徳大学の山崎茂明教授のご教示を仰いだところ、この研究者は8日に1編のペースで論文を発表するという多産ぶりで、こうしたストレスの中で、論文のねつ造に走ってしまったようである。もっとも、この事件は本人の問題に止まらず、ねつ造を見過ごしてきた論文共著者達、そして、雑誌の編集者や学会誌の査読者達の問題でもあり、学界としてむしろ後者の問題の方が深刻であろうとのことである（「応用物理」2003年4月号に山崎教授による調査論文が掲載される予定）。

昨今における、「アカウントビリティー論」の隆盛に伴って、研究評価のための計量的指標として、論文数、引用数、インパクト・ファクターなどが、一般新聞紙でもしばしば話題になっている。確かに計量化された指標では、それ自体の比較衡量は引き算、わり算で素人にも可能で、非常に分かりやすく便利であるに違いない。しかし、その計量化の過程では、上述のような「技術的」問題もあり、さらには論文自体の信憑性にも問題が発生することがある。しからば、当該分野の専門家集団に評価をすべて任せておけばよいかといえば、これは同業者による「お手盛り」になりがちで、アカウントビリティーとは相容れないおそれがある。このように、専門家対非専門家、玄人对素人の対決という構図は、学術に限らず、あらゆる評価の場面につきまとう課題である。ここにおいて、計量化は玄人と素人をつなぐ重要な糸になるべきものであろう。すでにみたとおり、現状では計量化に多くの問題があるのは確かである。とすれば、この際、計量化自体の研究をより一層深化、発展させてゆく必要があると考えられるところである。

COE特集

COEの研究計画

昨年11月、高等教育研究開発センターは、文部科学省平成14年度「21世紀COEプログラム」の人文系20分野の1つに選定され、5年間で「21世紀高等教育システムの構築と質的保証」研究プロジェクトに取り組むことになりました。これも大学教育研究センター時代から培ってきたコリグの研究蓄積の賜物であると同時に、社会構造の変化に対応した高等教育システムの構築とその質的保証の問題が、日本の高等教育にとって極めて重要な課題であり、大きな期待が寄せられたといえましょう。今回の21世紀COEの採択は、日本における高等教育研究の世界的拠点を形成する大きな機会が与えられたものです。

拠点形成の目的は、第1に、高等教育研究における世界水準の学問的生産性を上げ、国際学界への貢献を通じて国際社会と日本社会の発展に寄与すること、第2に、国際競争力を持つ機関の構築によって世界の学術交流の要衝としての「学問中心地」を形成することです。そのような拠点形成の実現に向けて、「高等教育研究の推進」、「国際的学術研究会の定期的開催」、「学術情報の発信及びデータベース構築」という3つの活動と、「将来の研究者の人材育成」を推し進めています。

本プログラムの中心的研究は①大学教育システムにおけるFD・SD（教員職員資質開発）の制度化と質的保証に関する研究②研究システムの制度化と質的保証に関する研究③大学統合ならびに組織的編成と機能の質的保証に関する研究の3つのプロジェクトで構成されており、教育学研究科から山崎博敏、安原義仁両教授、総合科学部から成定薫教授が参加しています。

さらには、研究員3名と研究技術員の3名を加え、4ヶ月間で公開研究会7回、国際セミナー1回、国際シンポジウム1回、若手高等教育研究者セミナー1回を開催して、研究を推進しています。

引き続き、コリグの皆様のご支援とご協力もいただきながら、取り組ましますので、センターにご注目ください。

各グループの進行状況

FD・SD班

リーダー：有本章（高等教育研究開発センター教授）

FD・SD班は、FD及びSDの大学への制度化と質的評価の問題を国際比較の視点から理論的かつ実証的に解明することを目的としている。同時に高等教育システムの構築とその質的保証の問題を教育指標の設定と測定の見点から追求することをめざしている。また、若手研究者の養成を研修会を通して行うことも重要な計画である。現在まで、本年度の研究計画に従って、次の諸点に着手し、徐々に推進している。

- ①FD及びSDに関するヒアリング調査では、全国の「大学教育研究センター等協議会」のメンバー校を中心に全学的なFDやSD実施責任者にヒアリング調査を実施して、機関レベルの取組を事例的に解明する作業を行っている。
- ②FD及びSDに関する訪問調査では、FD・SDの先進国や顕著な取組の見られる国内外の大学等を訪問してヒアリング実施や資料収集調査を展開している。外国では、アメリカ、イギリス、ドイツ、オーストラリア等へ研究者や研究協力者を派遣している。
- ③大学教員を対象にしたFDに関する意識調査では、来年度実施予定の全国調査の質問紙作成に着手し、研究会等で吟味している。
- ④若手高等教育研究者の養成計画では、大学院博士課程や学術振興会研究員の中の高等教育研究者を招聘して、研究交流と同時にセンターへの期待や若手研究者を育成する条件等に関する研究会を2月28、29日に開催した。
- ⑤「21世紀型高等教育システム構築と質的保証に関する国際シンポジウム」では、COEプログラムの主題を世界4カ国（英、蘭、米、日）の視点から検討することによって、全体的枠組みとFD・SDの統合性を追求せんとするもので、3月5日に広島大学との共同主催で開催した。
- ⑥カーネギー大学教授職国際比較調査の改訂版実施では、最初の実施から10年後の世界の実情を調査研究するために、数カ国で取り組む計画を推進しはじめている。
- ⑦全体主題と班の主題を統合した観点から、COE8カ国国際セミナーを6月中旬に開催する計画を推進している。

研究システム班

リーダー：山野井 敦徳（高等教育研究開発センター教授）

研究システム班(山野井・山崎・村澤・杉本・渡辺・葛城・三浦)は発足以来、月一回の割合で研究会を開催してきた。当班のメインテーマは「構造改革を通してフンボルトモデルの再構築による21世紀高等教育の研究システム像とその質的保証を探る」ことにある。

こうしたテーマを統合的かつ重点的に進めるために、①研究インフラレベル(インプット)：人事・研究費配分と研究システム等、②研究過程レベル(スループット)：研究者集団・ネットワーク・産学協同等、③研究評価レベル(アウトプット)：ジャーナルのレフェリーシステム・研究評価システム等、の各次元を整理し、その中から中心的なテーマを研究として推進したい。

現在すすめているノンテニユア・システム研究は、文献や海外の研究者との交流を通してその国際的な動向を把握すると同時に我が国の導入状況を分析している。日本の任期制に関しては、その背後仮説として流動性＝生産性仮説対大衆化仮説などの視点から分析できそうであるが、その導入調整過程においても我が国独自のメカニズムが働いているようだ。現在は導入の実態を把握している段階であるが、今後さらにアンケート調査、訪問調査方法を援用して、我が国の人事政策を探っていきたい。

こうした研究と並行して、アメリカの研究大学に着目しながら、研究大学システムの形成過程研究、自然科学を中心とした科学の報償体系や研究費配分の効率性と公平性に関する研究が山崎教授を中心に推進されている。村澤講師も4月から着任し、本格的な活動が期待される。いずれにしても、教育システム班、組織班や国際班等とも連携と協力を取りながら、研究を推進したい。

組織編成班

リーダー：羽田 貴史（高等教育研究開発センター教授）

今、大学にとって大きな関心は国際化にある。「世界最高水準の大学」というスローガンは、日本・韓国・中国などアジアの大学での流行りだが、学生が国境を越えて学ぶ動きとその制度化は、ポーロニャ宣言などEUをはじめ90年代の世界的特徴といってよい。大学は、近代高等教育システム、すなわち、国民国家の一部としての大学から離脱して、ボーダーレスなシステムに向かい始めているのである。大学の組織変容とガバナンスを研究する私たちのグループは、私(羽田)、黄助教授と院生の叶さん、COE研究員の渡辺さん、教育学研究科の仙波教授のメンバーで、2月下旬、復旦大学、浙江大学の調査を行い、アジアの国際化が急速に進んでいることを実感した。たとえば、復旦の場合、インタビューの相手が、北欧4カ国17大学が共同して復旦大学内に設立したノルディックセンターのスタッフで、妙齢の美女だったからインパクトがあったというわけでもないが、復旦大学にとってはヨーロッパの大学で学ぶチャンスを拡大することで優秀な学生を吸引し、北欧の大学にとっては、急成長している中国の学生に英語教育を行い、取り込むマーケット開拓という利害の一致するところで国際交流が進んでいることに目を見張る。

一方、統合や連合・連携によって、教育研究の質を高めたり、経営上の柔軟性を拡大する動きも世界的特徴である。私たちは、1月末には国内の大学統合の研究会を開催し、調査に旅立つ週の前半、「高等教育における統合と協同」をテーマに、オーストラリアからG・ハーマン氏(UNE)ら研究者を招聘して国際セミナーを開催した。浙江大学も4つの大学を統合し、世界水準の大学を建設しようとしている。このような中で、単一キャンパスと近代国民国家に立脚した従来の大学ガバナンスと経営のスタイルも変容せざるを得ない。統合の背景には、ITの普及があり、教育や運営の面でマルチ・キャンパス化を促進している。昨年末にメディア教育開発センターの吉田教授を招いてIT教育に関する研究会を開催したが、IT教育の質的保証(quality assurance)も大きな課題になりつつある。

日本語というバリアーがあり、高等教育が成熟している日本へのインパクトは、アジア諸国のそれとは同一ではないが、学位など出口管理があいまいな日本に、国際的な学生確保競争とそのための質的保証確立の動きをもたらす影響は何か、われわれの研究課題は大きく悩ましい。加えて、高等教育機関間だけでなく、産官学連携など異なるセクター間の連携・連合も拡大している。このコリーグが出るころには、成定教授、研究員の杉本さんとのNZ・オーストラリア調査、黄助教授の中国・ヨーロッパ調査、安原教授のイギリス調査が終わり、次の研究ステージの課題がより鮮明になるはずである。

2002年度後半の公開研究会

例年もそうですが、今年度は特に公開研究会の量と質に恵まれた年となりました。国際化や組織変化など COEプログラムの一部として実施されたものも多く、現在、活字化する作業を進めていますので、早晚、お手元に届けられるでしょう。皆様には題目と内容だけお知らせします。

	講 師	テ ー マ
第 6 回 (2002/10/24)	シエルダン・ロスブラッド氏 (元カリフォルニア大学歴史学科教授、高等教育センター長)	イギリス高等教育の《連合原理》と《単一モデル》に関する史的考察 — 質と水準のコントロールをめぐる —
第 7 回 (11/ 1)	ジャック・H・シュスター氏 (カリフォルニア・クレアモント大学院、教育及び公共政策担当教授)	アメリカにおける州立高等教育システム計画 — 枠組みはわかるか？日本への示唆 —
第 8 回 (11/22)	陳武元氏 (廈門大学助教授・創価大学客員教員) 張 曉 鷗 氏 (復旦大学高等教育研究所所長補佐・助教授、東洋大学社会学部研究員)	中国の高等教育大衆化における二級学院の役割 国際化と一流大学の創立：中国の模索
第 9 回 (12/24)	ウェンディ・スタップス氏 (英国高等教育評価機構)	イギリスの教育評価の実際 — 大学の基礎構造：質の保証と向上 —
第 10 回 (12/25)	吉田 文氏 (メディア教育開発センター教授)	情報技術は大学教育と組織をいかに変えるか
第 11 回 (2003/1/25)	大津 皓平氏 (東京商船大学教授) 伊藤 洋氏 (山梨大学副学長) 唐木 英明氏 (東京大学農学生命科学研究科教授) 田崎 宣義氏 (一橋大学社会科学部研究科長) 森島 朋三氏 (大学コンソーシアム京都)	大学の統合・連携 — 大学組織改革の新たな試み —
第 12 回 (2/17, 18)	グラント・ハーマン氏 (オーストラリア・ニューイングランド大学教授) ケイ・ハーマン氏 (オーストラリア・ニューイングランド大学準教授) リチャード・ジェームズ氏 (オーストラリア・メルボルン大学準教授) キース・モーガン氏 (高等教育研究開発センター) 羽田貴史氏 (高等教育研究開発センター)	COE 国際セミナー 「高等教育における統合と協同—オーストラリア、日本、ヨーロッパ—」
第 13 回 (2/19)	ルック・ウェーバー氏 (ジュネーブ大学教授、ジュネーブ大学前学長)	ヨーロッパ高等教育の主要問題 — 21 世紀高等教育システム構築と質の保証との関連において —
第 14 回 (3/ 7)	キース・モーガン氏 (高等教育研究開発センター)	日本の国立大学における量的測定の応用
第 15 回 (3/14)	佐野 清克氏 (日本私立学校振興・共済事業団 私学活性化促進支援センター長) 野田 文克氏 (日本私立学校振興・共済事業団 私学活性化促進支援センター研究調査員) 原田 正行氏 (高知学園短期大学教授・教務部長) 加納 三千子氏 (福山市立女子短期大学教授・学生部長)	短期大学教育の現状と課題 — 中国・四国・九州地域を中心に —

■ センター往来 ■ ■ [2002年4月~2003年3月14日]

(敬称略)

■ 2002年	
4 月	ヴォルフガング・イエガー (フライブルク大学) ステューピング・イエーチン (フライブルク大学)
5 月	スコット・スロヴィック (ネバダ大学) スーザン・ベインダー (ネバダ大学) 吉田 肇 (海上保安大学校) 東 明彦 (海上保安大学校)
6 月	レイブン・パートン (サウス・カロライナ州立高等教育委員会) ジョン・スモールス (サウス・カロライナ州立高等教育委員会) マーティン・フィンケルシュタイン (高等教育研究開発センター)
7 月	キース・モーガン (名古屋大学) 榎本 剛 (日本学術振興会)
8 月	トン・フローインSTEIN (オランダ大学協会)
9 月	ハンス・クレマー (東京大学) キース・モーガン (名古屋大学)
10 月	シエルダン・ロスブラッド (カリフォルニア大学)
11 月	ジャック・シュスター (クレアモント大学院) 陳 武元 (廈門大学) 張 曉 鷗 (復旦大学)
12 月	李 春生 (中国大使館) ウェンディ・スタップス (英国高等教育評価機構) 吉田 文 (メディア教育開発センター)
■ 2003年	
1 月	伊藤 洋 (山梨大学) 唐木 英明 (東京大学) 田崎 宣義 (一橋大学) 森島 朋三 (大学コンソーシアム京都)
2 月	グラント・ハーマン (ニューイングランド大学) ケイ・ハーマン (ニューイングランド大学) リチャード・ジェームズ (メルボルン大学) ルック・ウェーバー (ジュネーブ大学)
3 月	木村 孟 (大学評価・学位授与機構) ニック・サンダース (イギリス教育技能省) デイビッド・ティル (ノースカロライナ大学) トニー・クラーク (英国海外体験支援協会) 山本 真一 (筑波大学) サトリオ・スマントリ・ブジョネゴロ (インドネシア高等教育総局) 佐野 清克 (日本私立学校振興・共済事業団) 野田 文克 (日本私立学校振興・共済事業団) 原田 正行 (高知学園短期大学) 加納 三千子 (福山市立女子短期大学) 吉本 圭一 (九州大学)

新任者・離任者から一言

離任者から

□稲永 由紀

香川大学大学教育開発センター



2年8ヶ月の短い間でしたが、お世話になりました。高等教育研究者としての初期キャリアを、高等教育研究の現場(センター)とドラスティックな大学改革の現場(大学情報サービス室)との往来の中で過ごさせていただいたことは、なにもものにも代え難い貴重な経験となりました。職務上、センターへの関与には時間的にも物理的にも限界がありましたが、1人のセンタースタッフとして暖かく接していただき、心から感謝しております。

この刺激的な環境がどんなに貴重であったかを、今、改めて実感いたしております。今度は、設置されたばかりのセンターに1人目の専任教員として赴任しましたから、センターの体裁も中身も、まさにこれから築いていかなければなりません。全く白紙とはいえないキャンパスにどういった新しい絵を描けるか。そこでの過程を自らの研究活動にどう生かしていけるのか……引き続き、コリーグのみなさまにご指導を仰ぎながら、模索の日々を続けていくことにします。今後ともどうぞよろしく願っています。

この刺激的な環境がどんなに貴重であったかを、今、改めて実感いたしております。今度は、設置されたばかりのセンターに1人目の専任教員として赴任しましたから、センターの体裁も中身も、まさにこれから築いていかなければなりません。全く白紙とはいえないキャンパスにどういった新しい絵を描けるか。そこでの過程を自らの研究活動にどう生かしていけるのか……引き続き、コリーグのみなさまにご指導を仰ぎながら、模索の日々を続けていくことにします。今後ともどうぞよろしく願っています。

□柳井 伊砂



平成13年10月～平成14年12月という短い期間でしたが、私の人生の中で最も密度の濃い時間だったと思っております。数年間にわたる専業主婦生活後の仕事復帰でしたので、まず電話での対応、コピーのとり方からわかりません。事務室の方々の親切なご指導があってこそ毎日通う

事ができたと思っております。また、14年4月からは編集の仕事にも加わらせていただき、パンフレット作り、30周年誌、大学論集、高等教育研究叢書の編集等のお手伝いを担当いたしました。編集会議への出席、原稿依頼、原稿作成、入札、校正などの作業を経験する事ができ、このような機会をお与えくださいましたことに、そして、未熟な私をあたたかい目で見守り、ご指導くださいました先生方に深く感謝いたしております。このセンターでの貴重な体験を今後に生かしていければと思っております。本当にありがとうございました。

□ Martin Finkelstein

College of Education and Human Services, Seton Hall University



I came to RIHE "pulled" by a very limited and concrete agenda. First, I was going to collaborate with Prof. Yamanoi on a study of the emerging "non-tenure" system in Japan and place that study in a U.S./Australian comparative perspective (both of us working

with a colleague in Melbourne). Second, I was going to complete a manuscript with my Claremont colleague, Jack Schuster, on the restructuring of academic work and careers in the U.S. Oh, I thought I'd have plenty of time to learn Japanese and improve my piano playing; and maybe I'd travel throughout Asia on weekends; and hopefully I'd lose a lot of weight learning to love raw fish, rice and tofu.

Well, I'm happy to report that my concrete academic goals have been largely achieved—without breaking too much of a sweat. As you probably also have discerned, I have neither learned Japanese, nor substantially improved my piano playing (although, Lord knows, I try), nor lost a lot of weight.

While, then, largely successful in achieving priori academic goals, albeit conspicuously less successful in achieving personal ones, I found that several new, and very important, goals "emerged" during my stay—almost unexpectedly—and on these, I am pleased to report discernible progress. First, I developed some working relationships with a couple of "new" colleagues whom I had never met and whose interests do not precisely mirror my own, but with whom I could find some reciprocal or complementary interests which will carry over and expand my professional life after I depart; and with whom, I dare say, I may have developed the potential for a sustainable "working" relationship. Second, my very circumscribed work with Prof. Yamanoi has expanded in scope to include a longer-term collaboration with him and the Center of Excellence program which will, I think, clearly extend for the foreseeable future my connection with RIHE. Third, I got to interact to some extent with RIHE graduate students—mostly through presentations to several graduate classes. I had hoped to involve some of these students directly in my research, and was disappointed to find that quite difficult—something apparently "unexpected" in the Japanese University context. Fourth, I got to learn a lot about higher education in Asia, and as I grappled to "get my head around" the Japanese university system, by comparison, I learned a lot about what is distinctive in American higher education. I leave, for example, with a much clearer idea of the "costs and benefits" of taking a fundamentally "economic" perspective on higher education (a la U.S.), of "competition" in higher education, of corporate vs faculty leadership of the academic unit, etc. I learned a lot about "privatization" as a strategic response to "massification" (something of an entirely new vocabulary to me). Even more remote goals emerged including the idea of learning about alternative ways of viewing the world, alternative ways of valuing, and alternative principles for organizing life and work. Fortunately, I got clobbered over the head a few times; and,

after the dust settled, with a little reflection and help from my friends, I think I may have actually learned some "big" things that will carry over, and transform my approach to my field and, hell, my approach to living! For lack of space, I will spare you those observations for the moment!

A word about some disappointments (no experience I have ever had has been 100% positive!). I am disappointed that I did not get to participate in faculty meetings. This is NOT a "bad" joke; and it is, of course, a retrospective, and not a "real-time" assessment! While I did attend a few student research presentations conducted entirely in Japanese, the fact is the language barrier is NOT inconsequential. While I learned the folly of attending meetings conducted entirely in Japanese, I wish I had been able to have had access to simultaneous translation. I know I missed a lot. Second, I was disappointed by the relative intellectual "encapsulation" of RIHE. By that, I simply mean that everyone is so busy here doing their own work or attending meetings, that there is less opportunity that is desirable to foster intellectual exchange across various faculties and sectors of Hiroshima University. And there was less opportunity that I would have preferred for interaction among Japan's community of higher education scholars. I suppose here I am tilting at windmills! This is the scourge of "high-powered" contemporary academic life, the world over.....

All in all, this time at RIHE has been one of the most "developmental" and professionally rewarding experiences of my academic career. My great concern here is that I received so much more than I have given. Perhaps we should have spent some time early on working on a professional development "contract" -- on both sides. Having said that, I am deeply grateful for the unfettered free time to achieve my own goals and to develop and achieve new ones.

新任研究員

□杉本 和弘



今年(2003年)1月よりCOE研究員として着任いたしました。ちょうど1年前、戦後のオーストラリア高等教育改革をテーマにした博士論文で学位(名古屋大学より「博士(教育学)」)を取得し、そして今、日本で最も歴史のある当センターで高等教育研究に携わられていることを大変嬉しく思っ

ています。着任早々西条の雪と寒さに迎えられて少なからず驚きましたが、それでも広島大学の広くて緑豊かなキャンパスはとて居心地がよく、これから迎える爽やかな季節にこのキャンパスがどんな表情を見せてくれるのか楽しみにしています。そしてそれ以上に、現在の研究環境を活かしてこれまでの研究を継続・発展させていくとともに、COEプログラムの成功とセン

ターの発展に自分の持てる力を注ぎたいと思っています。特に、COEでは統合再編問題や国際関係の仕事を担当させていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

□渡辺 達雄



1年半の韓国留学を終え、所属先の名古屋大学で院生生活を再開したのですが、3ヶ月も経たないうちに広島に移動することになり、去年は本当に慌しい1年になりました。

高等教育研究を志して以来、幾度となく大学論集など当センターの研究出版物を参考にしてきましたが、

その幅広い領域にわたる多産な研究活動にいつも驚かされてきました。センターに対してはある種、憧れ?のようなものさえ感じておりましたが、こうした貴重な機会に恵まれたことは本当に幸運だったと思います。

ここでは、主にFD/SD研究プロジェクトに関わることとなります。大学の教育機能や経営管理(能力)の向上・改善が求められ、教員個人・組織レベルで多くの取り組みがなされておりますが、それらが実りあるものになるよう様々な側面からバックアップできるよう全力を尽くしたいと決意しております。ご指導のほど宜しくお願致します。

□葛城 浩一



この度COE研究員として着任いたしました葛城と申します。広島大学大学院教育学研究科の出身で、センターには学部の頃よりお世話になっております。その当時よりセンターで得られる情報と刺激には大変魅力を感じておりました。幸いにも、センターに採用され、高等教育研究を

志すものとして大変幸運に恵まれたと思っております。ただ、博士課程への入院期間が十分でなく、しかも急な人事のため、退院後のリハビリの時間も十分に取れておりません。そのため自分の無能さを痛感する毎日です。ただ、泣き言ばかりも言っておられませんので、唯一の武器である「若さ」をいかしてがんばっていく所存です。モットーは「予想は裏切り、期待は裏切らない」です。何かとご迷惑をおかけすることも多いと思いますが、何卒よろしくお願いたします。

□Keith Morgan



It is always a pleasure to return to Saijo and to work here in Hiroshima University. This year it is a particular pleasure. Despite what seems to be a prolonged—and cold—winter, the actual location of the University offers some reassurance that

international political frenzies are less fundamental than the annual routines of planting, growing and harvesting. Even so, the location of the university does not insulate it from the changes

in society or the need to respond to these changes. On this occasion, there is the exciting possibility for someone involved in research in higher education of not merely observation and comment, but of actual participation in an academic reformation. The Research Institute for Higher Education, now with its special status as a centre of research excellence, offers the opportunity to contribute to and to participate in the challenges and changes occasioned by the new structures. I look forward to being a member of this University during the period of transition and to the significant changes that will contribute to its continuing development.

新任技術員

□伊藤 さと美



平成14年12月1日付で、高等教育研究開発センターのCOE技術者に就任いたしました、伊藤 さと美と申します。昨年の10月にCOE技術者採用の面接のお話をいただいた時は、就職活動に挫折しかけていた時でした。そんな時に思いがけずCOE技術者の面接のお話をいただき、

葉をもつかむ思いで面接を受けさせていただきました。数日後に採用の連絡をいただいた時は、本当に嬉しかったのを思い出します。こちらでお仕事をさせていただく機会を与えていただき、大変感謝しております。まだ不慣れな事が多く、センターの皆様にはご迷惑をお掛けしておりますが、日々邁進できるよう努力して参りますので、ご指導の程、よろしくお願い致します。

お仕事をさせていただく中で、色々な方との貴重な出会いが沢山あると思っておりますが、その出会いを大切にしていきたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

□立田 恵



昨年12月1日よりお世話になっております。

こちらに来る2日前までは小さな個人病院の受付をしていましたので、全く違う環境での最初の1、2週間は、とても慌ただしい日々でした。

今まで、仕事でパソコンを使うことがなかったため、家に帰っても自分のパソコンを「見たくない・近づきたくない」という状態が当分続きましたが、最近では慣れたようです。

仕事については、センターに来て改めて勉強不足だということを思い知らされました。

パソコンの設定など、なかなかうまくいかないことがたくさんありますが、先生方や周りの方のご指導のもと、本当に少しですが私にできることが増えてきたような気がします。

私にとっては、パソコンに関する知識を広げるとてもいい機会を与えていただいたと思っております。

これから、「パソコンのことは何でも任せてください！」と言えるように頑張りますので、どうぞよろし

くお願いいたします。

院生から

□野村 正人

広島大学職員



「21世紀を担う大学運営のスペシャリスト養成。現職大学職員等の職務能力開発に特に力を注いでいます。」広島大学教育学研究科高等教育開発専攻の大学院生募集のポスターに書かれていた文面です。

社会人特別選抜の枠があるとはいえ、本専攻は昼間の大学院です。

「高等教育学」という職場のことを扱う大学院であっても、私たち事務職員には研修休職というものはありません。幸いに職場の中にある大学院なので、有給休暇をとりながら3年以上かけて修了すればなんとかなると思えました。

受験するだけでも上司の承諾書が必要でした。当時の附属図書館事務部長に進学の動機、予想される成果などを説明にあがったおり、事務部長は「そんなに肩に力をいれなくてもいいです。自分のためだけを考えて勉強してくればいいです。」と言って下さった。この瞬間、肩の力がぬけて気持ちが楽になったのを覚えています。

職場の同僚が仕事しているときに、2時間の有給休暇をとって講義に出かけるという日々がしばらく続きました。そういうことを許してくれた職場に感謝しています。同級生の暖かい励ましに何度も助けられました。そして職場やセンターのみなさんのおかげでなんと2年で修了できそうです。

4月からは職場に完全復帰いたします。おかけした迷惑以上のことを広島大学に返せるよう精動いたしますのでよろしく申し上げます。

□崔 澤

大学院



まず、三年にわたる日本での留学生活の中で、センターの皆さんにいろいろとお世話になりましたことを心から感謝し、厚くお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

広島大学高等教育研究開発センターでの研究生生活が、指導教官を始め、たくさん先生方々と先輩たちのご指導のもとで、無事終了できて大変うれしく思っております。また、センターで行われた全日本及び国際規模の研究会にも参加させていただいたことも光栄に存じます。僕自身が中国での大学生活とかなり違い、優れた環境の中で研究生生活を送ったことも誇りに思っております。

最初は慣れないもので、迷いばかりでしたが、段々慣れていくうちに、留学生活が楽しくなりました。留学してからこそ分かる外の世界や中国についても再び目を向けることができました。この度は、帰国することになりましたが、日本で身につけたものはきっと今後の自分の生活の中で、欠かせなくいかせるものになると思っております。

見失われていた原点回帰の試みだ



勝方 信一（読売新聞東京本社論説委員）

都道府県それぞれに国立大学が置かれたのは、何故か。大学が様々な形で地域に貢献することが、期待されたからだ。

大学の地域貢献には、地域に役立つ研究を進めることもある。より直接的に地域社会とかがかわる活動も必要となる。

その原点が見失われていた。

国立大学の法人化に地方国立大学の多くは抵抗した。国立大の統合にも反対した。戦後間もなくの一県一国立大の理念が、埃を払って反対理由に持ち出された。

その主張は、社会の共感を呼ばなかった。地域への貢献が、法人化、統合反対の理由とされればされるほど、多くの人は白けた。

法人化に向けた文部科学省の検討会議でのやりとりを思い出す。地方国立大の学長が地域と大学とのつながりを強調した。法人化推進派の一人が切り返した。「それだけ地域に支持されていれば大丈夫。法人化されても、立派にやっていますよ」

法人化や統合に地方自治体の反対は予想されたほどでもなかった。地域と地方大学とのつながりが希薄だったことを示す。

法人化が具体的な準備段階に入って、地域とのつながりが初めて本格的なテーマとなった。皮肉なことだが、地域の支持なしには、法人化後の地方国立大学は立ち行かないことが明白になったからだ。

大学の地域貢献の大切さが語られるようになった。文科省も「地域貢献特別支援事業」で予算をつけ、誘導した。地域貢献は大学評価の重要な項目にもなる。

いま自明のこととされている大学の地域貢献は、大学の自立のためにあることを確認すべきだろう。地方分権推進の文脈で語られることもあるが、自治体側が実施を強く望んだとは言えない。

だが、出発点がどうであれ、大学の地域貢献には、大きな可能性がある。地域貢献特別支援事業に選ばれた国立大学の計画は、それぞれ魅力的だ。

問題は、これからだ。地域から評価される成果をあげることができるかどうか。計画倒れに終わっては、大学の信頼は地に落ちる。

地域貢献を進めるだけでなく、これまでの地域との関係について、大学人の自己批判も必要だろう。地域と結びついた、新しい大学像の構築も欠かせない。そうした理論化の作業なしには、計画も砂上の楼閣となる。

過去に大学の地域貢献がなかった訳ではない。公害病の原因追及と対策に地方国立大学が果たした役割は大きかった。そうした歴史を思い起こすべきだろう。

ロンドン大学で、移民のための出張授業が展開されていたことを思い出す。博物館とタイアップして考古学の授業を行い、その授業が博物館の展示に反映される実践もあった。

地域において存在感を示す。そのために大学は様々なことができる。地域と結びついた大学。見失われていた原点への回帰である。

私と高等教育—教育行政学の講義を終えて—

仙波 克也 (広島大学大学院教育学研究科教授)



大学に関する研究をはじめたのは学部時代でした。学部3年生の卒論中間発表会でアメリカ合衆国の植民地時代のカレッジの性格について発表し、卒業論文では、「米国における高等教育制度の形成過程」(1962年)を、その続編として修士論文では、「アメリカ合衆国における高等教育制度の発展過程」(1964年)をまとめました。内容はアメリカの高等教育制度の歴史的な展開を紹介したもので、稚拙な論文でした。

1976年9月から1年間の在外研究期間にアメリカの研究者や留学生に出会い、大学や高等教育の研究の重要性と面白さを体験的に知ることになりました。また、ウィスコンシン大学のマッカーティ教授、カフマン教授やノルデン助教授の指導を受け、高等教育行政に関する研究の重要性を一層痛感することになりました。

1960年代からアメリカでは高等教育の普及が急速に進みはじめ、連邦政府も州政府もさまざまな政策や立法により高等教育の普及を重視するようになりました。1965年の高等教育法をはじめとする連邦高等教育法の制定により、アメリカの高等教育は急速に発展しはじめ、高等教育行政が自治からシステムに変革しました。各州立大学が理事会を設け、大学を管理運営する方式から、いくつかの大学を一括管理する制度や州内のすべての公立大学やコミュニティ・カレッジも含めて一括管理する高等教育の州管理制度が構築され、高等教育行政は新しい段階を迎えました。連邦法により、各州は州内の中等後教育計画を策定しないと連邦補助金の交付を受けられなくなったこともあり、各州は、計画と調整の機能を持つ州高等教育調整委員会や計画、調整と管理の機能を備えた州高等教育委員会を設置し、州内の中等後教育の重層化を図り、高等教育の拡充整備と同時に、研究大学の質の維持と向上に努めることになったため、アメリカの大学行政研究は一層魅力を増しました。

教員養成大学では、高等教育行政や大学行政を中心にした授業を行うことはほとんど不可能に近いことでした。短い期間でしたが、大学院の教育行政学の授業として学生の時代から関心のあったアメリカの高等教育の政策や行政制度について講義ができたことは大変幸せであったと回顧しています。その内容は、年度により若干異なりましたが、次のようなことを資料に基づき講述しました。

- | | |
|------------------------|----------------------------|
| 1) 高等教育を受ける権利 | 9) 20世紀前半の高等教育政策と高等教育行政の展開 |
| 2) 植民地時代のカレッジの管理制度の性格 | 10) 連邦教育局と教育省と高等教育行政 |
| 3) 独立戦争後の大学の出現と州立大学の理念 | 11) 州高等教育委員会制度の制度化 |
| 4) 19世紀前半の大学管理制度の性格 | 12) 州高等教育調整委員会の性格と課題 |
| 5) モリルと国有地賦と大学の創設 | 13) 州高等教育委員会の性格と課題 |
| 6) 19世紀後半の高等教育政策 | 14) 学生援助政策の展開と課題 |
| 7) 19世紀後半の大学院制度の展開 | 15) これからの高等教育行政の課題(まとめ) |
| 8) 連邦高等教育行政機関の変遷 | |

定年退職を迎えると、侘びしくなると思っていたのですが、初春の陽光が日に日に明るくなるように、気分的にはリラックスできるようになりました。特に、教育行政学の最終講義を終了した後は、解放感が湧き起こり、アメリカの人々がイースターを祝福し、歓喜する時のような爽快な気分になりました。今は、キャンパスや鏡山公園に花が咲きはじめる頃に静かに広島を離れることができると願っています。

研究成果をまとめることはできませんでしたが、自由な雰囲気の中で楽しく教育や研究に従事できたことを心から感謝しています。これからは、趣味として大学行政の研究を継続し、四国八十八カ所を巡礼するように、機会があれば、世界の大学を巡り、大学の伝統のすばらしさを享受できればと考えています。今後とも、なにとぞよろしくご指導の程お願い申し上げます。

最後に、つたない授業や研究発表に辛抱強く付き合ってくださった学生のみなさんに心から感謝しますとともに、ご清祥と今後の一層のご活躍を祈念しています。

情報調査室だより

2003年4月に当センターホームページがリニューアルされることに伴い情報調査室のコーナーも全面的にリニューアルすることとなりました。現在急ピッチで作業をしているところです。コーナーの目玉となるものをあげてみますと、

1. 高等教育研究開発センター情報調査室所蔵コレクションの書誌情報の公開

ご存知のようにセンターは日本で初の高等教育研究機関として1972年に設立されました。以来30年歴々のスタッフの方々のご尽力により日本は元より世界的にも有数の高等教育に関するコレクションを所蔵しております。コレクションの中には広大OPACの検索ではヒットできずセンターに直接来訪されないと所蔵が確認できないようなコレクションも多数あります。こういった資料も含めて当センターにあります全資料の書誌情報(書名・著者名・発行年などのこと)などが見られます。資料種別は、5パターンから成り立っており、以下の通りです。

- ①国内外図書(約30,000冊)
- ②国内外要覧・便覧・シラバスなど(約20,000点)
- ③官公庁ならびに諸機関発行報告書類(約15,000点)
- ④国内外雑誌(約170種)
- ⑤センター刊行物

①～⑤についてはすべてを横断検索することもでき、また資料種別ごとにも同様にできるようになっております。また、資料によっては目次語からも検索可能となっております。

2. 定期購入和洋雑誌見出し随時紹介

センターで定期的に購入されている雑誌について、高等教育関連の見出しを紹介いたします。定期的に更新される予定です。

3. 所蔵規程集一覧

国内の国公立大学を網羅しております。ただ今回の公開では書誌情報の一覧掲載だけとなり検索することはできません。

最後に情報調査室コーナーではなくセンターのホームページからになるのですが、センター過去30年間の刊行物がほぼ全文公開されることとなります。WEB上に全文が掲載されます。その際、従来普及しておりますPDFファイルではなくDjveファイルを使うことにより、より迅速に見ることが可能となりました。

尚、全文公開に際しまして、著作権が個人にあるとみなされるものについてはご本人から許諾が取れたものから随時公開する予定です。

編集後記

私自身、久しぶりのコリーグ編集であったが、COE技術員の全面協力によって、編集作業もスピーディーに行うことが出来た(感謝)。本センター今年度後半のビッグニュースは、本編にも取り上げたように、21世紀COEプログラムに採用されたことであろう。現在、本プログラムの目的を達成するために、種を蒔いている最中である。本誌次回号(10月号)では本センターの更なる活躍ぶりを皆様にお披露目できることと思う。(D)

人の異動が激しく落ち着かない半年ではあったが、いろいろな人との出会いがあるという点では、2002年後期のセンターは特筆すべきかも知れない。コリーグの記事もひときわ充実したと思う。特に、RIHEを観察したフィンケルシュタイン客員研究員の原稿にわが意を得たりとほくそえむのは私だけか。実質まとめたOさん、ご苦労さん。(H)